

## 広島大学東千田キャンパスおよび広島大学旧理学部1号館敷地内に 分布する石碑の属性と建立目的

嘉陽 礼文

広島大学平和センター

### **Attributes and Purpose of Erection of Stone Monuments Distributed on the Higashi-Senda Campus of Hiroshima University and the Grounds of the Former Faculty of Science Building No. 1 of Hiroshima University**

Rebun KAYO

The Center for Peace, Hiroshima University

#### **Abstract**

The purpose of this research is to clarify the distribution, attributes, contents of inscriptions, purpose of erection, etc. of all stone monuments on Hiroshima University's Higashi-Senda Campus and the grounds of the former Faculty of Science Building No. 1, which have not been researched prior to this study. The purpose of this research was to create a resource for those who wish to learn about the history of Hiroshima University and its predecessors, as well as the damage caused by the atomic bomb dropped on Hiroshima on 6 August 1945. Seven stone monuments were identified during this study; five on the Higashi-Senda Campus, and two on the grounds of the former Faculty of Science Building No. 1. The attributes of the seven monuments were as follows: Hiroshima Women's Higher Normal School (1), Hiroshima University of Letters and Science (2), Hiroshima University of Letters and Science and Hiroshima Higher Normal School together (2), and

Hiroshima University (2). The content of the inscriptions and the purpose of their establishment were all related to the schools that preceded Hiroshima University. These results indicate that all the stone monuments on the sites were derived from or related to the schools that were the predecessors Hiroshima University.

## 1. はじめに

日本においては様々な場所に石碑が建立されており、一部については所有者ならびに研究者等によって調査および情報保存が実施され、発信まで広く行われているものもある。しかし、全ての石碑において実施されているわけではなく、その実態には差異がある。石碑の調査および情報保存をすることは、大きく二つの意味で重要であると言える、一つ目は歴史学をはじめとした調査（建立目的、時代背景、など多岐にわたる情報の読み取り）として、二つ目は情報を将来にわたって残すための情報保存（複製化、アーカイブス化）として、である。

日本では古来より石碑の碑文を紙などの別媒体に採録する方法が多く試みられてきている（朽津 2018）。そうして、数多くの災害を経験してきた日本の歴史をかえりみると、災害によって石碑が紛失および破壊される可能性がいつ何時にも否定できないこと、また災害以外にも経年劣化や人為的な損壊行為を原因とした石碑表面の剥離や欠損による、刻印文字等が判読不能となる事態に対しての、完全な防御の実現については管理体制等の整備が無ければ難しい実情からも、現存する石碑の中で調査が未実施のものについて、特に情報保存を何かしらの手法によって極力早く実現することの重要性は言を俟たない。

広島大学の敷地内に分布する石碑についての先行研究としては 2020 年に佐藤らの研究チームによって広島大学東広島キャンパス（広島県東広島市鏡山 1 丁目）敷地内における 147 基の石碑の悉皆調査を実施した『広島大学東広島キャンパスの石碑の属性と分布』（佐藤・ほか 2020）がある。前述のような背景から、また佐藤らの研究を追随する形で、広島大学の敷地内に分布する未調査の石碑、および広島大学の敷地外に分布する広島大学に関係性のある未調査の石碑について、筆者は広島大学東千田キャンパス敷地内を中心として本研究の実施に至った、また佐藤らの研究では以下のような重要な問い掛けがなされている。「-前略- 長い歴史をもつ広島高等師範学校と広島文理大学の石碑が（悉皆調査の 147 基の石碑の中で）わずか 4 基しか無いことが注目されよう、-中略- 旧東千田キャンパスから移設されたと考えられるが、両校においてこの 4 基以外に石碑が建立されていたかは詳らかでない」。本研究では結果的にこれらの問いに対して部分的ではあるが答えを示唆することとなった。次に本研究の特徴としては、過去には広島大学が所有していたが現在には土地ならびに建物の所有権が広島大学から他機関などへ変更されたものの一つである広島大学旧理学部 1 号館の、敷地内の石碑についても、現在の広島大学東千田キャンパスとの同番地（広島県広島市中区東千田町 1 丁目 1-89）に分布す

るものであることから調査対象としたことが挙げられる。この広島大学旧理学部1号館の敷地内に分布する石碑は1995年（平成7年）の、東広島市に所在する東広島キャンパスへの広島大学統合移転完了年（広島大学2015）までに移設する対象として該当していた石碑が、何らかの原因によって移設に至らなかったものである可能性が極めて高い。その原因として推測されることとしては以下の二点が挙げられる、（一）石碑の表面の汚れおよび変色が激しいことから、刻印文字の判読が困難であったために石碑として認識されていなかったであろうこと、（二）石碑の周辺に石碑ではない石材が複数あり、それらの石材と外観が似ていたために混同されてしまった可能性が高く、石碑として認識されていなかったであろうこと、が挙げられる。これらの、いわゆる見落とし事例の可能性をふまえて本研究では、広島大学東千田キャンパスおよび広島大学旧理学部1号館の敷地内（広島県広島市中区東千田町1丁目1-89）（爆心地から約1,400m〈被爆建造物調査委員会1996〉）に分布する一辺が約20cm以上の長さを有する石材をすべて調査対象とし、石材の表面における刻印文字等の有無を確認することで石碑の見落としが無いかを改めて調査した。石碑の分布、属性、碑文内容、建立の目的、等を明らかにする本研究は、広島大学および広島大学の前身校の歴史のみならず、1945年（昭和20年）8月6日に広島へ投下された原子爆弾による被害の全体像の理解に資するものとなろう。なお、広島大学の主たるキャンパスは広島県内の三か所に所在しており、名称はそれぞれ、東広島キャンパス（東広島市）、東千田キャンパス（広島市中区）、霞キャンパス（広島市南区）、となっている。各キャンパスの歴史ならびに所在する学部等の情報については、本研究では割愛する。

## 2. 研究方法

本研究は、旧理学部1号館の敷地内において2013年（平成25年）9月および2016年（平成28年）5月に実施した調査を踏まえつつ、追加的に東千田キャンパス敷地内において2023年（令和5年）9月～11月、及び12月に二回に分けて実施した調査に基づいたものである。合計四回実施された上記調査においては、現地作業として、刻印等の有無の確認、石碑の撮影、同計測、を実施した。その後、建立場所のマッピングおよび撮影した写真を元に碑文の読み取りを実施し、読み取った情報から、所属部局、建立年、目的（種類）、建立者、当初の建立場所、材質、寸法、碑文の刻印面、を分析した。撮影にはデジタルカメラを使用した、機種名はCanon PowerShot SX620 HSである。撮影にあたっては日照角度によって石碑表面に陰影が強く出る石碑もあったため、撮影時刻および天候を考慮した対策を講じ、問題無く実施した（照明装置およびストロボ〈カメラのフラッシュ〉は使用していない）。次に石碑および埋め込まれた銘板の状態は良好であり、刻印されている文字は全て肉眼で判読可能であった。同じく写真撮影された画像においても文字が判読可能であったことから、拓本ならびに非接触の技術であるSfM（Structure from Motion）-MVS（Multi Video Stereo）による調査手法は実施していない。

なお、旧理学部 1 号館敷地内への立ち入りについては、現在の管理者である広島市の、担当部局職員の同行のもと実施した。また同敷地内に分布する石碑については、現在の所有者である広島市との協議の結果、昨今の広島市内における平和モニュメント等への器物損壊事件に鑑み、維持管理上における安全性確保のため、写真および地図については、本研究においては非表示とし、公表可能な情報のみの記載とした。<sup>1</sup>

### 3. 結果

本研究によって、合計 7 基の石碑が確認された。以下に東千田キャンパスおよび広島大学旧理学部 1 号館敷地内における石碑の分布、建立年、種類（目的）建立者等、属性の特徴について述べる。また、図 1 に石碑の分布、表 1 に石碑の一覧を示し、巻末には石碑の写真および碑文を掲載した。

#### (1) 分布

東千田キャンパスは法学部（法学部夜間主コース含む）の拠点であり、東千田キャンパス敷地内に分布する石碑は法学部建物に最も近いことから 5 基の石碑は法学部の分布とした。次に旧理学部 1 号館の敷地内に分布する 2 基の石碑は旧理学部 1 号館の分布とした。

#### (2) 建立年

建立年が古い順に、1935 年（昭和 10 年）、1936 年（昭和 11 年）、1972 年（昭和 47 年）、1974 年（昭和 49 年）、1979 年（昭和 54 年）、1995 年（平成 7 年）であった。（1 基は建立年不明）

#### (3) 種類（建立目的）

慰霊碑 3 基、卒業記念 2 基、周年記念 1 基、発祥地 1 基、となっており、卒業記念のうちの 1 基には「卒業記念樹」の文字が確認された。

#### (4) 碑文から判明した種類（建立目的）の主体および碑文の内容から確認された傾向

広島女子高等師範学校 1 基、広島文理科大学 2 基、広島文理科大学および広島高等師範学校の併記 2 基、広島大学 2 基、となっており、その全ての碑文に、広島大学の前身校に関する内容が確認された。

---

<sup>1</sup> 中国新聞 2012 年 9 月 22 日掲載『「許せぬ」被爆者ら怒り原爆慰霊碑に塗料 逮捕』

広島では、原爆に関するモニュメント等へ対しての器物損壊事件があとを絶たない、2003 年 3 月 8 日には、平和記念公園内にある原爆の子の像に捧げられていた折り鶴が放火されるという事件が発生している。

#### (5) 建立者

広島文理科大学 2 基、広島女子高等師範学校 1 基、尚志会 1 基、広島大学 1 基、不明 2 基、となっており、広島大学前身校の数は、尚志会を含めると広島文理科大学および広島女子高等師範学校合計で 4 基となり、その割合は約 60%であった。

#### (6) 当初の建立場所

聞き取り調査によって得られた情報から、当初の建立場所を特定できたものは 1 基であり、旧理学部 1 号館の南側土地から現在の場所へ移設したものである（移設年詳細不明、少なくとも 1985 年（昭和 60 年）までは旧理学部 1 号館建物の南側に分布していたことについての証言がある〔宮脇 2023〕）その他の 6 基については現在の場所が当初からの建立場所として分布していたと推測される。

### 4. 考察

石碑の調査および情報保存については、先行研究においてもその意義および重要性は指摘されている（谷川・ほか 2017）（朽津 2018）。また調査の手法としては、文献史学、金石学、美術史学、考古学など、諸分野の方法論を用いる必要が出てくる（篠原 2022）。しかし、限られた時間および予算の範囲内において個人で調査を実施する場合には、各学問分野において求められる専門的な調査項目を全て網羅することは困難を伴う。そこで最低限度の調査項目の一例として、本研究の調査を実施することにより、その不足部分を各学問分野の研究者がそれぞれ再調査し、深めていくことで解決するものと思し、本研究においては佐藤らの研究内容を参考として調査項目を決定し実施に至った。また、情報保存については、現状として多くの石碑は野ざらしの環境下で設置されているため、雨風による風化や将来に発生する地震災害による破損と紛失が避けられない（谷川・ほか 2017）ことから、喫緊の課題であることは明白である。日本においては、特に地震による被害は甚大であることが多い現状から、地震発生時には石碑についても建物の倒壊や落下物による損壊および破損、土石流による埋没、地震後の津波による流失などに遭遇する危険な状況下にさらされる。しかし石碑は重量もあり、基本的に地面に固定されているものであることから容易にその場を移動できず、多くの石碑は災害時に人力の運搬によって人と避難を共にできる対象物とはされない。このように日本における石碑を取り巻く趨勢から本研究においては佐藤らが実施した広島大学東広島キャンパス敷地内の 147 基の石碑の悉皆調査に追随し、広島大学東千田キャンパス敷地内を中心として関連地を含め 7 基の石碑の悉皆調査を実施し、情報保存を実現した。本研究の調査結果ならびに先行研究の調査結果を併せて考察した結果、以下の内容が明らかになった。

(1) 広島大学東千田キャンパス敷地内に分布する全ての石碑が広島大学の前身校に関係性を有する石碑であること。

(2) 前身校の学生の、原子爆弾の被害に関わる石碑が 6 基確認されたこと。また第二次世界大戦前に建立されたものは 2 基であること。最も新しいものは 1995 年（平成 7 年）であることから、全ての石碑が東広島市への統合移転完了の年（1995 年〔平成 7 年〕）までに建立されたものであること。1996 年（平成 8 年）以降、2023 年（令和 5 年）現在までの 27 年間の期間中には石碑の建立が無かったこと。

(3) 原子爆弾による被爆の影響があると推測される石碑が 2 基確認されたこと。旧理学部 1 号館敷地内において確認された 2 基の石碑である 1935 年（昭和 10 年）および 1936 年（昭和 11 年）建立のものは建立者が広島文理科大学であったことから、これらの石碑は被爆時に爆心地から約 1,400m の距離に分布していた可能性が高く、直接被爆していると推測されること。

(4) 東広島市への統合移転完了（1995 年〔平成 7 年〕）にともなつての、旧理学部 1 号館敷地を含む旧東千田キャンパスにおける広島高等師範学校ならびに広島文理科大学が建立者もしくはは目的の主体となっている石碑の移設に関しては、佐藤（佐藤・ほか 2020）らの研究の調査結果を併せると、以下の 3 通りの状況が明らかになった、

(Ⅰ) 東広島キャンパスへ移設されたものは 4 基であること。

(Ⅱ) 東千田キャンパス内で移設されたものは 1 基であること。

(Ⅲ) 移設されなかったものは 2 基であること。

## 5. おわりに—結論と今後の研究への課題

以上のように広島大学東千田キャンパスおよび旧理学部 1 号館敷地内における石碑の悉皆調査を実施したことによって、未調査の石碑の調査および情報保存が実現されることとなった。また佐藤らによって 2020 年に先行して実施された広島大学東広島キャンパス敷地内の石碑の悉皆調査において生じた問いである「広島高等師範学校と広島文理科大学の石碑の数」ならびに「旧東千田キャンパスから東広島キャンパスへの、石碑の移設数およびその他の石碑の存在」について、部分的にはあるが答えを示唆することとなった。もっとも以下の課題も残る。

最初に、石碑に関する聞き取り調査についてである。前身校の卒業生の多くはすでに死去しており、また存命者も高齢であり、2019 年（平成 31 年、令和元年）以降の新型コロナウイルス感染防止対策の実態をはじめ、聞き取り調査全般において多角的な困難が伴う実情に鑑み、石碑に関係する同卒業生への聞き取り調査は実施できていない。また、石碑の設計ならびに碑文の揮毫および撰文を手掛けた人物も、広島大学第 4 代学長飯島宗一、同第 5 代学長竹山晴夫

(広島大学文書館 2015) はじめ多くは死去しており、建立時のエピソードおよび関係情報について聞き取り調査が可能な関係者を探すことが難しい状況である。

次に、旧理学部 1 号館の敷地内に分布している石碑が示唆する情報がときに断片的であり、今後の発見資料との照合が待たれる点であろう。例えば石碑が言及する記念樹である。旧理学部 1 号館の敷地内で確認された石碑のうちの 1 基には「卒業記念樹」の文字が確認できたが、その傍らに樹木は確認できなかった。建立当時には石碑の至近距離に、卒業記念樹として植樹された樹木があったと推測されるが、原爆投下後の 1945 年（昭和 20 年）8 月 7 日に広島文理科大学（現在の広島大学旧理学部 1 号館）へ避難した被爆者（当時 19 歳）の証言によると、広島文理科大学の敷地内の樹木は全て焼失してしまっていた（栗原 2022）とのことであり、また当時の同敷地内における植樹の関係資料は確認できなかったことから樹種の特定はできていない。また、この 2 基の石碑には、肉眼による外観観察においては、被爆の影響と推測されるひび割れや欠け等の、石碑表面の外観上の目立った損傷は確認されていない。また、石碑の残留放射線調査は石材の破壊を伴うことから実施していない。

広島大学の前身校に関係する石碑についても未だその全容が把握されていないため、今後は東千田キャンパスの敷地外に分布する未調査の石碑について、同キャンパス周囲の市街地における調査を進める予定である。調査候補地としては、過去には広島大学の前身校が所在していたが現在には広島大学の所有地ではなくなっている場所および 1945 年（昭和 20 年）8 月 6 日に前身校の学生が学徒動員中に原爆被害にあった場所等が挙げられる。例として広島高等師範学校附属山中高等女学校の石碑が千田第一公園（広島県広島市中区千田町 2 丁目 5-13）内に分布している。また、広島大学の主たるキャンパスの一つである霞キャンパス（広島県広島市南区霞 1 丁目 2-3）をはじめ、同附属小、中、高等学校の敷地内における石碑については未調査であることから調査を進めたい。次に、本研究の対象となった石碑のうち少なくとも、建立年が 1972 年（昭和 47 年）以降の石碑に関する聞き取り調査については、前述した本研究の課題の項に重複するが、対応策として、当時に広島大学へ勤務していた広島大学の教職員やその家族等に、少しでも関係情報（その人物の記憶を含む）を所有している人物が存命であることは否定できないので、聞き取り調査が可能な人物を探し、調査の打診を、感染防止対策などの安全配慮を講じた上で積極的に進めることによって、未発表の史実の発見へとつなげたい。本研究の結果を端緒として、読者の身近にある石碑の調査および情報保存が進むことを願ってやまない。

## 謝辞

多摩大学の内藤旭恵准教授には旧理学部 1 号館敷地内における石碑の、2023 年（令和 5 年）8 月現在の状況確認について貴重な情報を頂きました。広島大学東千田地区支援室支援調整員の宮脇克也氏には東千田キャンパス敷地内の石碑につき移設前の状況や位置について貴重な

証言を頂きました。同東千田地区支援室室長の田中恵一氏には本研究対象全体の石碑の確認および情報収集について詳細なアドバイスを頂きました。また匿名の査読者による適切なコメントによって本稿は大きく改善しました。ここに深く感謝申し上げます。

## 参考文献・参考資料

朽津信明（2018）、「日本における石碑保存の歴史的事例とその考え方」『保存科学』（58）、55-71

嘉陽礼文、吉栖正生（2013）、広島大学旧理学部1号館敷地内における被爆建造物調査、2013年9月27日実施。

嘉陽礼文（2016）、広島大学旧理学部1号館敷地内における被爆石材調査、2016年5月13日実施。

栗原明子氏への筆者による聞き取り調査（2022）、2022年5月26日実施。

宮脇克也氏（広島大学東千田地区支援室支援調整員）への筆者による聞き取り調査（2023）、2023年10月24日、2023年12月26日実施。

佐藤大規、藤田慧、池田直樹、岩佐佳哉、大岩眞太郎、沈彧馨、富田大智、原田歩、藤岡柚衣、藤村大智、横川知司、頼富収吾、熊原康博、（2020）、「広島大学東広島キャンパスの石碑の属性と分布」『広島大学総合博物館研究報告』（12）、119-136。

中國新聞、2012年9月24日掲載『「許せぬ」被爆者ら怒り原爆慰霊碑に塗料 逮捕』、<https://www.hiroshimapeacemedia.jp/p=7581>。

被爆建造物調査委員会編、庄野直美監修、（1996）、『被爆50周年未来への記録ーヒロシマの被爆建物は語る』、広島平和記念資料館、138-139。

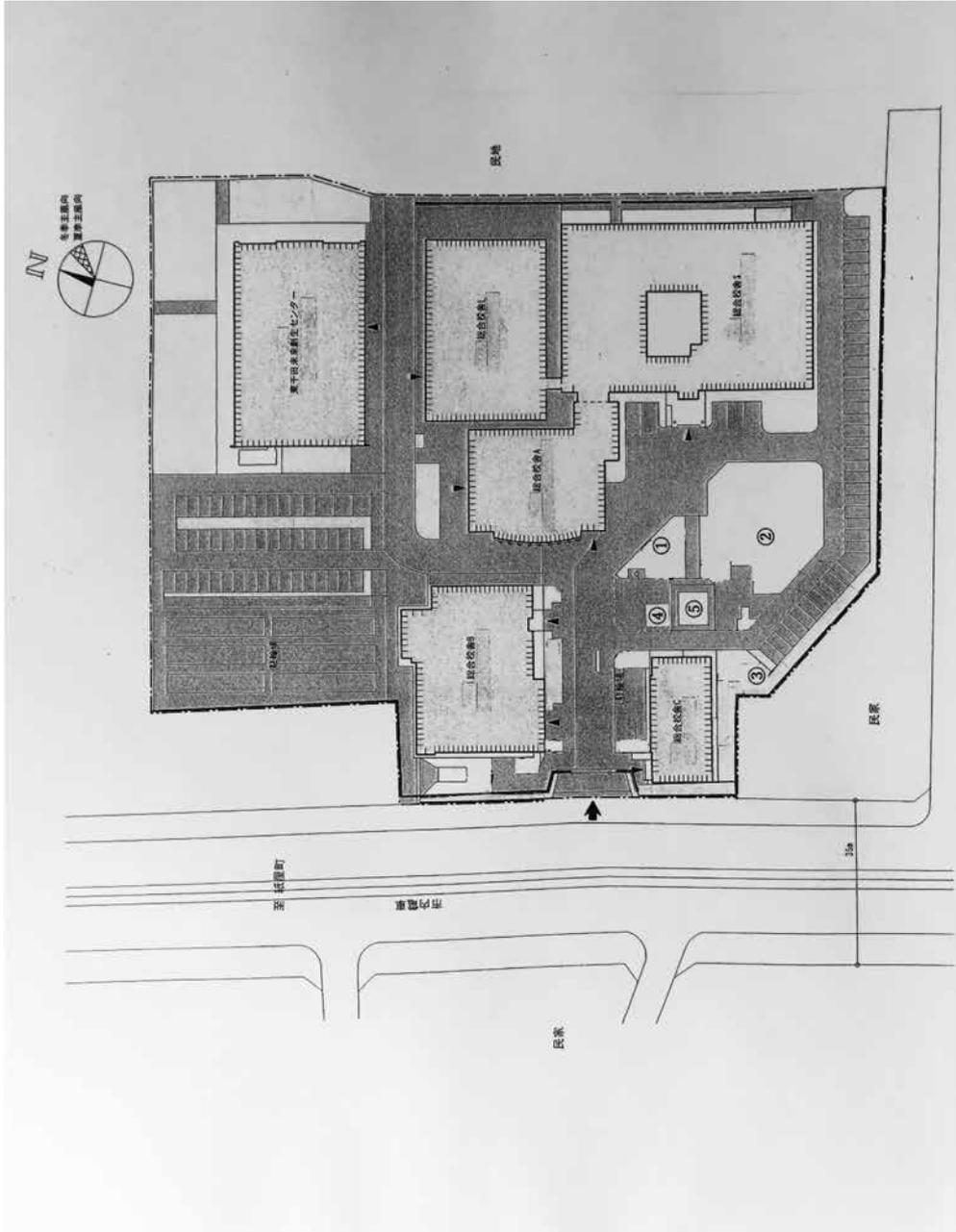
広島大学文書館編（2015）、『広島大学の歴史』、広島大学文書館7-24。

篠原啓方（2022）「東アジア石碑調査の方法と成果、展望」『KU-ORCASが開くデジタル化時代の東アジア文化研究：オープン・プラットフォームで浮かび上がる、新たな東アジアの姿』関西大学アジア・オープン・リサーチセンター、257-268

谷川 亘、浦本 豪一郎、内山 庄一郎、折中 新、山品 匡史、岡本 桂典、原 忠（2017）

「四国地域の地震津浪碑の3次元デジタルアーカイブ化とデータベース化に向けた取り組み」『JpGU-AGU Joint Meeting 2017』

図 1



広島大学施設整備グループ所蔵の東千田キャンパス  
平面図を基に筆者が加工して作成したもの

住所：広島県広島市中区東千田町 1 丁目 1-89. 縮尺：S=1/1,000.

表 1

番号	所属部局	建立年	種類 建立目的	建立者	建立時の場所	材質	形状および寸法 (縦×横×厚) cm※1	碑文(前面)	碑文(背面)	碑文(その他)
①	法学部	1995(平成7)年	周年記念	広島女子高等学校	不明	石碑	自然石(縦長の石) 130×60×28	広島女子高等学校 等師範学校 記念碑	※碑文巻末 (石碑番号 ①)	(右面) 後藤光男書
②	法学部	1979(昭和54)年8月吉日	発祥地	尚志会	不明	石碑	自然石 (横長菱形の石) 縦 90×正面横 125× 右面横 200×左面横 150×背面 310	広島高等師 範学校 1902-1952) 広島文理科 大学(1929- 1962) 發祥之地		(右面) 1979年8月吉日 尚志會建之 広島大学長竹 山晴夫書
③	法学部	1972(昭和47)年12月25日	慰靈碑	不明	旧理学部1号館の南側土地から現在の位置へ移設したものの(移設年の詳細不明)	石碑	(長方形に加工した石材) (台座は含めず) 103×24×20	広島文理科大学 広島高等師範学校 原爆死没者遺骨埋葬の地	昭和四十七年十二月二十五日 建之	

④	法学部	不明	慰霊碑 (⑤の表示と思われ)	不明 (広島大学と思われ)	東千田キャンパス	石碑	(長方形に加工した石材) 110×15×12	広島大学原爆死者追悼之碑	※碑文卷末 (石碑番号⑤)	(背面下段右寄りの石の一つに) 佐藤重夫設計
⑤	法学部	1974(昭和49)年8月6日	慰霊碑	広島大学	東千田キャンパス	石碑	(中央に巨岩を1つ配置、周囲に不定形の岩を配置)(計測不能のため参考として高さ及び敷地の周囲を計測)縦約230×正面横660×左右面横640			
⑥	広島市	1935(昭和10)年3月	卒業記念	広島文理科大学	不明(広島文理科大学敷地内と思われる)	石碑	(位置情報と同様、維持管理上の安全性確保の为非表示)	昭和十年三月文理科大学第四回卒業記念樹		
⑦	広島市	1936(昭和11)年	卒業記念	広島文理科大学	広島文理科大学敷地内	石碑	(位置情報と同様、維持管理上の安全性確保の为非表示)	文理科大学第五回卒業	昭和十一年三月卒	

(※1) ミリ以下は四捨五入

石碑写真



③



②



①



④



⑤

(石碑番号 ①)

「時」のかたみに

広島女子高等師範学校は一九四五年三月文部省直轄学校として創設された我が国三番目の女高師で千田町二丁目■(註)山中高等女学校理事長山中トシの英断により国家に寄付された校地校舎諸設備を母体に同校を附属山中高女として開校した経緯を持つ。当時は太平洋戦争末期で連日の空爆下を全国から八一名の生徒が入学、間もなく原爆により校舎は瓦解焼失し七名の死者と全員被爆の傷痕を負って敗戦を迎える。戦後は安浦町・福山市などを移転のち一九五二年三月四期生の卒業を最後に閉校した。僅か七年の校運ながら戦後の教育界に二五五名の同窓生を送り出し新制広島大学に包括された。

碑文

一九九五年創立五十周年を記念して建立  
広島女子高等師範学校 卒業生一同

(註) 文中の■の部分には、本文に使用されている文字の大きさの四分の一のフォントで以下の四文字が記述されている

財団  
法人

(石碑番号 ⑤)

碑文

昭和二十年八月六日、廣島に原子爆弾が投下せられた、一瞬、莫大な破壊を生じ、無数の人命を奪ったのみならず、その被害は長く今日に及び、心身の傷痕なお癒ゆることがない、本学前身諸学校のうち、廣島文理科大学、廣島高等学校、廣島工業専門学校、廣島高等師範学校、同附属中学校、同附属国民学校、廣島女子高等師範学校、同附属山中高等女学校、廣島師範学校、同附属国民学校、廣島縣立醫學専門学校、廣島市立工業専門学校は當時市内に所在し、直接被災した。その教職員並びに学生生徒児童は学校の内外において死傷し、また後遺症により没した者多きを数える。爾來星霜三十年を経て、被爆により死没せられた人々を悼む心吾人において益々ふかく、核兵器を憎み、その完全な廃絶と、世界恒久の平和を願うこと切なるものがある。ここに有志相はかり、建碑して追悼の意を表するとともに、廣島大学が人類平和の確立に敢然奮興すべきふかい学問的責務を負う所以を永久に銘記する。

昭和四十九年八月六日

廣島大学学長 飯島宗一 撰

元廣島大学教授 井上政雄 書